

『遠野物語』新考へ向かって

田野 崎 昭 夫

目 次

1. 「遠野物語の日」と説明板から
2. 『遠野物語』と『遠野物語拾遺』
3. 『遠野物語』の出版をたどって
4. 大海嘯とサムトの婆など

1. 「遠野物語の日」と説明板から

『遠野物語』が柳田國男によって書かれて1910年(明治43年)6月に聚精堂から出版されて、2010年(平成22年)に100周年を迎え岩手県遠野市では6月12、13日に「遠野物語100年祭」を開催して、6月14日を「遠野物語の日」と定めている。

それは6月14日が『遠野物語』の発行日だからである。即ち、その奥付には明治43年6月11日印刷、明治43年6月14日発行(実価金50銭)、著者兼発行者東京市牛込区市ヶ谷加賀町2丁目60¹⁾番地柳田國男、売捌所東京市本郷区竜岡町34番地聚精堂と書かれている。そしてその表紙「遠野物語」の側辺には350部ノ内第〇〇〇号とあり、発行部数の何冊めかが記入されるようになっている。たしか第1号は佐々木喜善に贈られている²⁾。

そしてさらに遠野市は、東京都において、同じ2010年(平成22年)の11月4日、午後1時半から東京都新宿区、学校法人大妻学院の協力を得て、大妻女子大学加賀寮となっている柳田國男の旧居跡に、説明板として「『遠野物語』誕生の場所 柳田國男旧居跡」の除幕式が挙行された。

そして引き続き会場を移動して、同日午後3時から、凸版印刷株式会社の協力を得て、東京都

文京区、凸版印刷株式会社トッパン小石川ビルの公開空地において、説明板として「『遠野物語』の話者 佐々木喜善旧居跡」の除幕式が挙行され参会者歓談のあと午後5時過ぎ閉会した。

この『遠野物語』の説明板の除幕式が11月4日に行われたのは、言うまでもなく、柳田國男と佐々木喜善が初めて会った日だからである。柳田國男は水野葉舟から佐々木喜善のことを聞いており、この日水野葉舟は佐々木喜善を伴って柳田國男宅を訪問して、柳田國男は佐々木喜善から遠野郷の話聞いて深更に及ぶのである。

この状況と経緯を最も基本的に述べている文献として、1975年(昭和50年)2月24日の『岩手日報』紙上に掲載された鎌田久子「『遠野物語』下染め」がある。これは同年2月27日から3月4日まで東京の日本橋高島屋百貨店で「遠野物語と柳田國男展」が開催されるに当たって、『岩手日報』が紙上特集を組んだ紙面のなかの中心的な記事である。このなかの該当する部分を下記に引用する。

「遠野物語」は、遠野の人・佐々木喜善氏から、柳田先生がかの地に伝わる話をきかれてまとめたものであるが、このはじめての出会いの日、明治四十一年十一月四日、先生は「佐々木は岩手県遠野の人、その山ざとはよほど趣味あるところなり、其話を其ままかきとめて『遠野物語』をつくる」

と、手帳に記し、翌日には早くも「遠野物語をかく」と、その心のたかまりを伝えてい

る。十三日には「竹島町に佐々木繁をとひて遠野物語に書入をなす 十八日夜再話をきく約束」十八日には「夜佐々木及水野来 又佐々木君の遠野話をきく夜十二時迄」と、翌年初夏まで、折にふれて佐々木氏からの遠野の話をかかれています。明治四十一年には、柳田先生は宮内書記官となり、宿直などもあって、生活環境もややかわり、仕事と学問の峡にあってまよっておられる気配が多いが、秋、佐々木氏に逢って後、「いよいよ計画ある仕事にとりかからねはならずとおもふ」と、そのゆく道を決めておられる。年の暮れには「それよりもうれしきは学問の上に新しき希望多く出来たることなり、ねがはくハ諸国の学者に求めらるるやうなる本を著ハさん」と、新しい決意を記されている。

このようにして、佐々木喜善（筆名：繁、鏡石）は、1908年（明治41年）11月4日から翌年1909年（明治42年）初夏にかけて、水野葉舟と共に、あるいは単独で東京市小石川区武島町3番地古川方の寄寓先から、東京市牛込区市ヶ谷加賀町2丁目16番地の柳田國男宅に1時間程歩いて訪問して『遠野物語』の内容を話したのであった。

『佐々木喜善全集』Ⅳの日記によれば、喜善は1908年（明治41年）2月29日東京市小石川区竹早町71番地堀田方からこの小石川区武島町3番地古川方へ転居している。そしてこの年の11月4日に上述のように柳田國男と初めて会い、しかも異例なことに11月13日午前には柳田國男が武島町の古川宅を訪れて喜善に会い「遠野物語に書入をなす」をしている。なお、柳田國男は1909年（明治42年）8月遠野に旅して佐々木喜善宅を訪れるが喜善は不在であった。そして同様なことは、20年後柳田國男が講演のため1929年（昭和4年）9月24日仙台に来て川内大工町73番地の借家に佐々木喜善を訪ねたことであった。

2. 『遠野物語』と『遠野物語拾遺』

ところで『遠野物語』について、「『遠野物語』誕生の場所 柳田國男の旧居跡」（東京都新宿区市谷加賀町2丁目4番31号大妻女子大学加賀寮）と「『遠野物語』の話者 佐々木喜善旧居跡」（東京都文京区水道1丁目3番21号、凸版印刷株式会社「トッパン小石川ビル」公開空地）とに、『遠野物語』に関する説明板が設置されるまでの百年余の間に、当初『遠野物語』350部が1910年（明治43年）6月14日に発行されて、その評価が進展するにつれて『遠野物語』は珍書、稀観本となっていた。

そこでそのあと、『遠野物語』がどのように再刊されていったかを、筆者の知る限りでたどって考察してみたい。

まず『遠野物語』が刊行されて25年後、1935年（昭和10年）7月に、『遠野物語』（増補版）が『遠野物語拾遺』を加えて、前部に初版序文と柳田國男の「再版覚書」、後部に折口信夫しのぶの「後記」を付して郷土研究社から出版された。これは画期的なことで、それまで稀観本であった『遠野物語』を一般社会に開放して入手しやすくし、そのことによってこの書を世間的に有名にし、またこの書についての研究が発展する緒となったからである。

その「再版覚書」で柳田國男は、『遠野物語』は「全くの道楽仕事」で「この書の真価以上に珍重せられた」ので「覆刻を急ぐことに」したと言う。そうして「多少の増訂をして二版を出そうと思ひ、」「佐々木君にはもっと材料があるなら送ってくるように言ってやった。同君も大いに悦び、手帖にあるだけを全部原稿用紙に清書して、ある時持って来て、どさりと私の机の上に置いた」。ここでは、『遠野物語』の二版を出そうと行動したのは何時なのかは、はっきりしない。しかし佐々木喜善が原稿を柳田國男の所へ持ってきたのは、『佐々木喜善全集』Ⅳの年譜に「1927年（昭和2年）6月6日、柳田國男に遠野物語補遺の第2回目の原稿68話分

を出す。前回の47話と合わせて105話となる。」とあるのでこの頃であろう。

こうして柳田國男が、数量が多く、重複があり、出たくないものもまじっている原稿を整理して、「自分の原稿がまだ半分ほどしか進まぬうちに、」1931年（昭和6年）1月三元社から佐々木喜善は『聴耳草紙』を刊行する。これについては観方はいろいろあるが、何といても健康上からの焦りがあると考えられる。実際、彼はこの翌々年、1933年（昭和8年）9月29日腎臓病を悪化させて世界している。

ところで柳田國男が「是非とも遠野物語の拾遺として出そうと思って居たものが、」『聴耳草紙』で発表されて「拍子抜け」するのであるが、佐々木喜善の原稿整理がなかなか進まなかったのは「数量が多く」での他にも事情がある。「再版覚書」ではふれていないが、柳田國男の居宅が東京市牛込区市ヶ谷加賀町2丁目16番地（現在の東京都新宿区市ヶ谷加賀町2丁目4番31号）から、東京府北多摩郡砧村（現在の東京都世田谷区成城6丁目）へ1927年（昭和2年）8月に移転している。上述したように、佐々木喜善が原稿を持ってきたのは、この年の6月頃であるから加賀町の居宅の方である。

なお、現在「大妻女子大学寮」となっている柳田國男の旧宅は、1941年（昭和16年）3月1日に大妻学院が購入している。1927年から1941年までの14年間は柳田國男が移転後も所有していたわけである。

ところで1933年（昭和8年）佐々木喜善が他界して「今度は事情がちがうから、」『遠野物語』初版本は「原形を存して置き」て、佐々木喜善の原稿を、柳田國男が整理して「書き改めたものが約半分、残りは鈴木（脩一）君が同じ方針の下に」整理して『遠野物語拾遺』として「順序体裁等はほぼ本編（『遠野物語』）に準ずる」299話からなる作品ができて1935年（昭和10年）7月『遠野物語』（増補版）の中に加えて出版される（引用部分中の括弧内は筆者の補筆である）。

上述したように、その前部に柳田國男の「初版序文」と「再版覚書」が、後部に折口信夫の「後記」が掲載されている。この「後記」からは、『遠野物語』（増補版）の刊行事情を側面から知ることができる。

折口信夫は「後記」で、前半に「遠野」を訪問したことを述べているが、これは柳田國男が遠野を初訪したのが「20年前」と書いているので、1909年（明治42年）の20年後の1929年（昭和4年）とも考えられるが、『佐々木喜善全集』Ⅳの年譜によれば、1930年（昭和5年）「8月29日～9月5日、折口信夫とともに東北旅行。29日、松島を見て花巻に泊まる。30日、土淵の家に帰りさんさ踊りや手踊りを呼んで見せる。31日、家を立ち自動車で新里村の茂市から刈屋に行く。」とあるから、この時であると考えられる。なお、折口信夫は喜善の1歳年下である。

そこでは花巻から軽便鉄道で遠野へ来るまでの風景が述べられている。ところが遠野へ近づくと、突然目前にけたたましく上閉伊郡聯合青年団の運動競技会の号砲がなり響く。これが「前記」『遠野物語』初版序文と「後記」との「小半世紀の内に、あった変改であった」のである。そこでは遠野駅に着いて、土淵まで佐々木喜善が調達した自動車の車掌が昼から酒で酔っていて雑沓する町通りを挙手して進む様子を述べている。

佐々木喜善はこの前年1929年（昭和4年）2月に仙台に移転するが母親は土淵に残る。この日は佐々木夫人も仙台から還って来ている。折口信夫はこの土淵の屋敷の辺りを巡って、柳田國男が遠野に初めて訪れた頃を回想している。仙人峠の方から風が来る遠野平をふり返ってみたりして盛岡の方へ行った柳田國男の姿を想像して羨んでいる。

また「ざしきわらし」が居ると伝えられる小座敷を案内してもらったりして、そこ「からかみ」でしきった部屋で、折口信夫は一夜を過ごしている。

以上のように述べて折口信夫は「後記」の後半

では、1930年（昭和5年）の自分の遠野初訪の回想から、1935年（昭和10年）7月の『遠野物語』（増補版）の刊行へと叙述を進める。この間の年月の隔たりを「その時から又、凡十年の月日が立って居る。」と述べているが、実際は5年程である。

前部の柳田國男の「再版覚書」にあるように、佐々木喜善が『聴耳草紙』を刊行してしまったために、進めていた『遠野物語拾遺』の作成は頓挫するのであるが、折口信夫によれば、誰からともなくこれを再開しようと言い出して実現しようとする気運になっていく。ところで、ずるさもあるが折口たち先輩層は『遠野物語拾遺』の編集作業を、若手後輩のこだわりが少なくてやりやすい鈴木木一（折口の國學院大での教え子）に申し出させる。こうして佐々木喜善が提出した原稿が『遠野物語拾遺』299話として1935年（昭和10年）7月に刊行される。

そしてこの『遠野物語』（増補版）の巻頭には、当時池上隆祐が所蔵した『遠野物語』初稿本三部作の写真が掲載されている。これは池上隆祐が東京帝大農学部、法学部の学生時代に成城の住宅地に住んでいて成城学園近くの柳田國男宅に通って師事し、気に入られて貰ったものである³⁾。

こうして折口信夫は、自分を猿餅とりの猿にたとえて、反省と自責の念を述べている。そしてこの年が柳田國男の60歳還暦の祝年であるとともに、佐々木喜善の三回忌であることで、『遠野物語』の登場者たち、ざしきわらしから寒戸^{さむと}の婆に至るまで、そして故人佐々木喜善も歡喜して祝っている、と折口信夫は三礼して「後記」を結んでいる。

3. 『遠野物語』の出版をたどって

『遠野物語』が1910年（明治43年）6月聚精堂から刊行されてから四半世紀たって、ようやく1935年（昭和10年）7月郷土研究社から『遠野物語』（増補版）が刊行されるのであるが、柳田國男はこのなかの『遠野物語拾遺』は佐々木喜善の原

稿をまとめたものであるからとして『定本柳田國男集』から省いている。しかしとにかく、『遠野物語』を「旧本に対する無益の珍重沙汰が、尚いつまでも続かぬとも限らぬ」として「原形を存して置いた」ことは重要である。前述したように、『遠野物語』（増補版）の刊行によって『遠野物語』を中心とする研究が画期的に進展したからである。

戦前においていちやくこの『遠野物語』（増補版）の影響で遠野を訪れて『遠野物語』を論じて発言したのは、当時東北大学にいたフランス文学者の桑原武夫である。桑原はこの十数年前に初版本の『遠野物語』を借りて読んだことがあったが、改めて『遠野物語』（増補版）を「読み進むうちに、私は『人煙の稀少なること北海道石狩の平野よりも甚だし』というこの遠野地方を一見したくなった。」と『『遠野物語』から』（『文学界』1937年（昭和12年）7月号）に書いている。

この時は、折口信夫が遠野を訪れた時から7年程あとであるが、遠野駅へ近づくと、迎えたのはけたたましい運動競技会の号砲ではなくて「上閉伊郡経済ブロック中央工場」と書かれた巨大なコンクリートの煙突である。桑原は名前はあげないが「部屋数は三十を越している」大きな宿屋⁴⁾に泊まって、なお早池峰の山頂で泊まっている。早池峰山と遠野の間にはトロッコ鉄道が敷設されて千古の深林が伐採され『遠野物語』の伝える光景が変貌していることを桑原武夫は歎くことよりも、「ただ『遠野物語』という尊い人間記録がよい時期に編まれたことを、改めて感謝せねばならぬと痛感したのみである」と述べている。そして「この物語の編者が簡古な文語体をして内容と完全に合致せしめ、一つ一つの話を素朴でしかも気品の高い短章としたことは、卓見であり手腕であった」と激賞している。

この桑原武夫の『『遠野物語』から』の文章は、のちに1943年（昭和18年）1月、岩波文庫の『遠野物語・山の人生』柳田國男著の巻末に収載される。そしてなお、戦後になって1976年（昭和51

年) 4月岩波文庫『遠野物語・山の人生』柳田國男著の新版が出るが、ここではさらに桑原武夫の「解説」も加えられている。ここでは、柳田國男が他界しているのだから、かなり遠慮のない柳田國男論が述べられている。たとえば「彼の養子縁組みと抒情詩否定とは深くつらなっているのではないか、という憶測を私は禁じられなくなる」と書いている。けれども末尾で、「古典的作品の解説に憶測を述べたことは非礼であったかも知れない。しかし、基本資料がじゅうぶん公開されていない現状においてはやむをえないのである。精密な伝記があらわれ、また手記などが公けにされて、この解説が書き改めねばならぬ日のくることを切望する」と結んでいる。

ところで、戦後の刊行に言及してしまったが、『遠野物語』を岩波文庫として刊行するに当たって、なぜ郷土出版社からの『遠野物語』(増補版)のように『遠野物語拾遺』と合わせてではなくて、『山の人生』と合わせて文庫版にしたのであろうか。もちろん著者柳田國男の意向によってではあるが、理由は岩波文庫版では述べられていない。わずかに、この岩波文庫版が戦後1976年の新版になって付けられた外被紙に「併収の『山の人生』は、そうした柳田学の展開を画する記念碑的労作である。(解説・桑原武夫)とあるのみである。やはり一般的に言われている、『遠野物語拾遺』の内容は基本的に佐々木喜善の原稿だからであるという通説に拠るほかはないだろう。しかし戦後になって『遠野物語』が続々と文庫本になって刊行されるが、何れも『遠野物語拾遺』と併収されているので、今となっては岩波文庫版が異例にみえるのは否めない。

こうしてみると、何と言っても1935年(昭和10年)の『遠野物語』(増補版)はその後の『遠野物語』研究の重要な基点になっている。まず初版の『遠野物語』の無題の前文は「初版序文」と題が付けられ、その次の「再版覚書」は柳田國男が『遠野物語拾遺』をまとめた苦勞が語られている。

そして『遠野物語』119話の題目が、項目別に話の番号で示されている。続いて本文は番号順に記述されていくが、各頁上部に余白を設けて必要に応じて頭注が記されている。

続く『遠野物語拾遺』299話も、『遠野物語』に準じて題目が項目別に話の番号で示されている。『遠野物語拾遺』は項目数では『遠野物語』の3倍近くあるが、頁数をくらべてみると約2, 3倍にとどまっている。

こうして末尾に折口信夫の「後記」が、前半の5年程前に遠野を初めて訪れた時の回想と、出版することになった『遠野物語』(増補版)が柳田國男の還暦の年に刊行されることになった祝福とを述べている。

このようにして、その後柳田國男『遠野物語』として刊行されるものは、初版の『遠野物語』119話を取り扱っている本と、『遠野物語』と『遠野物語拾遺』を収め「再版覚書」と折口信夫の「後記」を加えた本の2種類が定型となっている。そして各社から文庫本としても出版されている。

即ち、戦後になると『遠野物語』は一種の古典として、続々としていろいろな出版社の文庫に収められる。1948年(昭和23年)10月文藝春秋社の文藝春秋選書に、1951年(昭和26年)12月創元社の創元文庫に、1955年(昭和30年)10月角川書店の角川文庫に、1973年(昭和48年)9月新潮社の新潮文庫に、それぞれ収められるという具合である。

しかもそこでは、『遠野物語』をあとから出す出版社において、そしてその出版社が『遠野物語』の改版や新版を出す場合との二重の意味において、さまざまな執筆者が「解説」や「論稿」を収載したりして、新味や趣向をこらしている。これは出版社として売上げを高める努力であって当然である。

たとえば岩波文庫では、上述したように桑原武夫が旧版では『文学界』に1937年(昭和12年)7月号に発表した「『遠野物語』から」を1943年(昭和18年)1月の「付記」で転載しているが、戦後

になって1976年（昭和51年）4月の新版では、柳田國男が1962年（昭和37年）8月他界しているので、かなり忌憚のない「解説」をあらたに書いている。なお、初版『遠野物語』第119話歌謡にはないが、この文庫新版では振り仮名が付いているのは収穫である。

また角川文庫では、1955年（昭和30年）10月の初版では、1935年（昭和10年）に郷土研究社から出版された『遠野物語』（増補版）で折口信夫が書いた「後記」が「解説」と改題されて収載された。ところがさらに、1979年（昭和54年）5月発行角川文庫の『遠野物語』改版では、折口信夫の文章は「初版解説」と改題されて、そのあとにあらたに大藤時彦による「解説」が書かれている。そしてなおそのあと2004年（平成16年）5月の新版では鶴見太郎の「動機の継承」と題する文章が収載されている。そこでは、桑原武夫が三高時代、友人今西錦司から『遠野物語』の初版本を借り読んで関心を深めたことを考察している。

なお、桑原武夫が遠野を訪れたのは1936年（昭和11年）夏休みとする説があるが、郷土研究社からの『遠野物語』（増補版）が1935年（昭和10年）の7月に刊行されているので夏休みと考えてよい。したがってこの「増補版」を読んでもすぐ旅行というのはかなり無理なので、翌年の夏休みという説の方が有力と言えよう（石井正己・遠野物語研究所編『遠野物語と21世紀・東北日本の古層へ』三弥井書店2010年（平成22年）176頁）。

また新潮文庫では、1973年（昭和48年）9月の版で巻末に執筆した山本健吉の「解説」を、1992年（平成4年）5月発行の新版では、その文末の6行程が削られて収載されて、そのあとにさらに、吉本隆明の「『遠野物語』の意味」と題する31頁にわたる文章が収載されている。

ところで1935年（昭和10年）の『遠野物語』（増補版）を底本として、同様に頭注方式であるが戦後になっているので新仮名遣いと新漢字で、1972年（昭和47年）11月に大和書房から大型版

の『遠野物語』が48頁にわたる写真を付けて出版された。扉の題字は『遠野物語』（増補版）の金田一京助の書をとっている。頭注は原本の注に加えて、新しく注を付けているが、頁によっては却って煩雑すぎて読みにくい程である。そして『遠野物語拾遺』には、郷土研究社発行の「増補版」にはない題目が299話すべてに付けられている。

折口信夫の「後記」のあとに、谷川健一が22頁にわたる解説を書き、さらに島亭が57項目の補注と3項の付記を書いている。谷川健一は、現地の遠野に1957年（昭和32年）の頃、即ち「昭和の町村合併」で遠野町が周辺の7ヵ村と合併して1954年（昭和29年）12月1日遠野市となってから2年余を経た頃と、1972年（昭和47年）6月の2回訪れて、その15年間の変化を語っている。

たとえば、初めて訪れたときまだ残っていた高善旅館の建物は、2回目に訪れたときは取りこわされて無くなっていた。この建物はあとで「とおの昔話村」に移築されて「柳翁宿」となる。またデンデラ野は畑となって見分けがつかなくなり、サムト（登戸）の家並みも道路ぞいにはこりをかぶっていた。しかし、案内されてのぼった物見山の風景はすばらしかったし、そこからの遠野の郷は、早池峯や六角牛を背景とした猿ヶ石川が蛇行し、いくつかの街道が山あいには消えていた。柳田國男が訪れ、そのあと折口信夫が訪れたときと今また時代は幾変遷したが、私は『遠野物語』があいもかわらず生きていることをひしと感じた、と谷川健一は述べて解説を結んでいる。

ところで筆者が目にしたのは、谷川健一のこの2回の遠野訪問の間に、遠野についての訪問記が出版されていることである。それは加藤秀俊・米山俊直共著『北上の文化一新・遠野物語―』社会思想社・現代教養文庫1963年（昭和38年）4月刊である。加藤と米山は谷川健一の第1回の遠野訪問よりあとの1958年（昭和33年）の冬の第1回と同じ年の5月の第2回、それから1962年（昭和37年）3月、4月頃2人は別行動で第3回

と、都合3回の訪問調査をしている。訪問日数は定かではないが、最も本格的なのは第2回の訪問調査である。そしてこれら訪問調査を終えた翌年4月には『北上の文化』を刊行している。

そして谷川健一の第2回の遠野訪問は1972年(昭和47年)6月であるから、『北上の文化』の刊行後約9年後となるわけである。そして谷川健一が解説を書いた大和書房発行の『遠野物語』はその年の11月にできたのである。この両著の刊行までの時間的緩急の対照については、いろいろな批評があるかもしれない。しかし両著の性格はあくまでも異なっている。『北上の文化—遠野物語—』は、柳田國男著『遠野物語』の内容をふまえて随所で引用もしながら、現在の遠野市の『遠野物語』にまつわることを聞き、また訪問調査して、さらに遠野地域社会の現在の状況を研究調査している。

これに対して、大和書房刊行『遠野物語』は、あくまでも柳田國男著『遠野物語』とこれに関連する『遠野物語拾遺』そのものの研究であり考察である。それは前述したように、わずらわしい程の頭注があり、補注がある。また索引も詳細であり研究文献として評価されよう。

ところで実は大和書房からの『遠野物語』刊行の前に、1968年(昭和43年)9月に『遠野物語』の復刻版が350部ノ内第166号を底本として日本近代文学館から名著復刻全集の1冊として刊行されていて、柳田國男著『遠野物語』の稀覯本化を抑制するとともに、その本格的な研究に貢献していることを指摘したい。

また後藤総一郎監修、遠野常民大学編著『注釈遠野物語』筑摩書房1997年(平成9年)8月刊は、柳田國男著『遠野物語』のみを対象にして初版本と毛筆本を対照させながら、初版本よりも詳細な題目をしかも順序を追ってわかりやすく表示して、非常に綿密な注釈を述べている。この本は後藤総一郎の強い監修指導があって実現したものであるが、この数年後、2003年(平成15年)1月12日

後藤総一郎は他界する。学界のためにもまことに残念のきわみである。

なお英訳の『遠野物語』について紹介しておく。

The Legends of Tōno by Kunio Yanagita, translated, with an introduction, by Ronald A. Morse, English translation ©1975, published by The Japan Foundation.

以上、柳田國男『遠野物語』の刊行書について、筆者の知る限りにおいて述べてきたが、考察をいろいろ前後して時期を扱ったりしているので、これらを刊行年月順に整理して次の頁に一覧表をかがけておく。なぜなら新しく刊行される刊行書は、それまでの既刊行書をふまえて新規刊行の意義を示すのが一般的だからである。

4. 大海嘯とサムトの婆など

近年、遠野地方にとって最も衝撃を受けた事は、何と言っても2011年(平成23年)3月11日午後2時46分に起こって、今日なお影響を及ぼしている「東日本大震災」の発生である。

『遠野物語』には、三陸沿岸の話はいくつか出てくる。たとえば、第84話の西洋人の話、第106話の蜃気楼の話である。なおここで指摘したいのは、柳田國男の作成した目次に相当する「題目」では第106話が抜けおちていることである。どの項目にも見当たらない。柳田國男にしては珍しいことである。序でに言わせてもらうならば、第84話の西洋人の話は「題目」では「昔の人」の項目の7話に含まれている。

ところで「東日本大震災」で三陸沿岸が大津波の襲来を受けて多数の死者、行方不明者があって『遠野物語』を考える時、その第99話が誰しも考えるところである。これは1896年(明治29年)6月15日夜の「明治三陸地震津波」にまつわる話である。この時は岩手県沿岸を中心に被災したが、旧暦五月節句に当たりしかも雨が降っており、波音と雨音がまじって対応がくれ、岩手県が死者18,158人というとくに甚大な被害を受けたと言わ

書名	西暦 和暦 月	備考
遠野物語原典	1910, 明治 43年 6月	
遠野物語増補版	1935, 昭和 10年 7月	以下特記なければ遠野物語拾遺を収載
岩波文庫遠野物語	1943, 昭和 18年 1月	山の人生を収載 桑原武夫『遠野物語から』
文藝春秋選書遠野物語	1948, 昭和 23年 10月	
創元文庫遠野物語	1951, 昭和 26年 12月	
角川文庫遠野物語	1955, 昭和 30年 10月	
遠野物語復刻版	1968, 昭和 43年 9月	遠野物語のみ
遠野物語大和書房版	1972, 昭和 47年 11月	谷川健一解説
新潮文庫遠野物語	1973, 昭和 48年 9月	山本健吉解説
岩波文庫遠野物語新版	1976, 昭和 51年 4月	山の人生を収載 桑原武夫解説
角川文庫遠野物語改版	1979, 昭和 54年 5月	大藤時彦解説
新潮文庫遠野物語新版	1992, 平成 4年 5月	吉本隆明「遠野物語の意味」
注釈遠野物語	1997, 平成 9年 8月	遠野物語のみ
角川文庫遠野物語新版	2004, 平成 16年 5月	鶴見太郎「動機の継承」

れる。第99話は次の通りである。

九九 土淵村の助役北川清と云ふ人の家は字火石^{ヒイシ}に在り。代々の山隊にて祖父は正福院と云ひ、學者にて著作多く、村の爲に盡したる人なり。清の弟に福二と云ふ人は海岸の田の濱へ髻^{オホツナミ}に行きたるが、先年の大海嘯に遭ひて妻と子とを失ひ、生き残りたる二人の子と共に元の屋敷の地に小屋を掛けて一年ばかりありき。夏の初の月夜に便所に起き出でしが、遠く離れたる所に在りて行く道も浪の打つ渚なり。霧の布きたる夜なりしが、その霧の中より男女二人の者の近よるを見れば、女は正しく亡くなりし我妻なり。思はず其跡をつけて、遙々と船越村の方へ行く崎の洞ある所まで追ひ行き、名を呼びたるに、振返りてにこと笑ひたり。男はと見れば此も同じ里の者に海嘯の難に死せし者なり。自分が髻に入りし以前に互に深く心を通はせたりと聞きし男なり。今は此人と夫婦になりてありと云ふに、子供は可愛くは無いのかと云へば、女は少しく顔の色を變へて泣きたり。死したる人と物

言ふとは思はずして、悲しく情なくなりたれば足元を見て在りし間に、男女は再び足早にそこを立ち退きて、小浦^{コウラ}へ行く道の山陰を廻り見えずなりたり。追ひかけて見たりしがふと死したる者なりしと心付き、夜明まで道^{ミチ}中に立ちて考へ、朝になりて歸りたり。其後久しく煩ひたりと云へり。

いつか「東日本大震災」関連の新聞記事で、この第99話に出ている福二という人の孫かひまご（曾孫）に当たる人のことが出ていたが、佐々木喜善がこの第99話をどのようにして「創作」したのかについて筆者はこの程知った。『遠野物語』について大変詳細な注釈を加えた後藤総一郎監修・遠野常民大学編著『注釈遠野物語』筑摩書房1997年（平成9年）でもこのことは述べていない。

筆者にとってその手がかりは、遠野市立博物館編『佐々木喜善全集』第4巻遠野市立博物館2003年（平成15年）所収の「佐々木喜善日記」である。以下その部分を示す。

1908年（明治41年）1月28日の項

一月二十八日

何んとなく春めいて来た。市ヶ谷の方は霞んである。霞かと思ったら砂ほこりだ。前田の処へ行くと昨夜徹夜したとのことで寝てみた。今日午後から水野君の処へ行く約束であったので、一時から出かけることにして一旦帰った。

午後二人で市ヶ谷から電車に乗った。久しぶりで行ったので話が沢山ある。僕と水野君との間に何んとなく隔ての雲がとれた様な心がした。夜の十時頃まで話し込んで帰ったのは十一時頃、極く寒い。

僕はお化け話を書かうと思いついた。田ノ浜の叔父のこと。「朧月」。おぼろ夜に津波で死んだ妻に海岸でふいと出会う。——というのを。

佐々木喜善は『遠野物語』第99話の内容をこの時に「創作」したのである。それは、昔々あるところに、という漠然としたものではなく、実在した人物や事件をめぐって「創作」したものである。

そこで、この観点に立って『遠野物語』の第99話を考えると、北川清、北川福二、北川正福院、田の浜、船越村、先年の大海嘯、これらの人名、地名、事件は実在した、または実在している。ただし、小浦という地名は存在せず、『注釈遠野物語』によれば大浦は存在し、これを土地の人は「おおうら」ではなく、「おうら」と呼んでいるので、柳田國男はこれを漢字に「小浦」としたのはと述べている。しかし「自分が聾に入りし以前に互に深く心を通はせたりと聞きし男」は存在したかどうかは何んとも云えない。

こうして改めて『遠野物語』第99話を読んでもみると、前段の「元の屋敷の地に小屋を掛けて一年ばかりありき」までは事実の叙述である。そして「夏の初の月夜に便所に起き出でしが」以降は佐々木喜善の日記にあるように「僕はお化け話を書か

うと思いついた」のである。第99話は、まさに「おぼろ夜に津波で死んだ妻に海岸でふいと出会う」という展開である。なお喜善の生家^{アツラ}厚楽家としてみれば、祖母の実家のきょうだい北川福二は（日記での）田ノ浜の叔父は正確には大叔父であり、聾入りして長根福二になっている。

さて次に、『遠野物語』（増補版）が定型となっていることは前述したが、そこで折口信夫が「後記」で柳田國男の還暦と『遠野物語』（増補版）刊行を祝って「我国の『心』と『土』とに、最即した斯学問の長者の爲に、喜び交す響きに違ひない。寒戸の婆も、この風に馭して来るであらう」と述べている。この「寒戸の婆」について最近検討と論議が続いているようである。

寒戸の婆は『遠野物語』の第8話に登場する。題目では「昔の人」に分類されている、次の文章である。

八 ^{タソガレ}黄昏に女や子供の家の外に出て居る者はよく神隠しにあふことは他の國々と同じ。松崎村の寒戸^{サムト}と云ふ所の民家にて、若き娘梨の樹の下に草履を脱ぎ置きたるまゝ、行方も知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、或日親類知音の人々其家に集りてありし處へ、極めて老いさらぼひて其女歸り來れり。如何にして歸つて來たかと問へば、人々に逢ひたかりし故歸りしなり、さらば又行かんとて、再び跡を留めず行き失せたり。其日は風の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、けふはサムト^{ババ}の婆が歸つて來さうな日なりと云ふ。

この第8話で、「松崎村の寒戸と云ふ所」の民家の娘が行方不明になって、30年余の後になって風の烈しく吹く日に老婆となって帰ってきて、その家に集まっていた皆に逢ってまた行ってしまった話である。そして遠野郷の人はこの老婆を「サムトの婆」と名付けて、風が強く吹く日はこの『遠

野物語』第8話を思い出している、という5文からなる話である。

ここで問題は、松崎村には寒戸という地名はないことである。これについての論議は、大橋進「佐々木喜善の初期短編小説と『遠野物語』」における考察を参照して進めたい。この論文は前掲した石井正己・遠野物語研究所編『遠野物語と21世紀・東北日本の古層へ』に収載されている。

まず第1に、松崎村の登戸（ノボト）という地名をサムトと聞きちがえて柳田國男が書いたという説である。菊池照雄『山深き遠野の里の物語せよ』梟社1989年（平成1年）6月、12頁で述べている。

第2に、全く別の綾織村の寒風（サムカゼ）という地名が混同され転訛したという説であるが、あまり説得力がない。

第3に、『遠野物語』初稿の毛筆本でサムトと書き、これを漢字表記にして「寒渡」とし、さらに刊本で「寒戸」にしたという説である。これは佐々木喜善がサムトと言っていることを示している。しかしなぜ佐々木喜善が松崎村サムトという所の民家の娘の話をするに当たって、サムトという松崎村には存在しない地名をあげたのかは不明である。

第4に、佐々木喜善の初期短編小説の一つである「館の家」に登場する2人の子供の会話の中で「サムトの婆々」について語られている。ここでは「山の奥の奥のおーくの方にサムトの婆々が居て」とサムトが地名とは必ずしも言えないようである。しかもそれは複数の「サムトの婆々」なもの注目される。

岩本由輝は佐々木喜善の小説「館の家」を知るに及んで自分の寒戸の誤記説を撤回して、佐々木喜善が柳田國男に会う1年9ヵ月前の作品をとりあげている。しかし、「館の家」での「血の雨血の風が吹く時」出現する子供を奪りに来る恐ろしい「サムトの婆々」と、『遠野物語』第8話の「サムトの婆」とは、もっと峻別すべきであろう。

ところで筆者は、小田急沿線に住んでいるが、小田急線に登戸（のぼりと）駅がある。この松崎村では登戸（のぼと）と言いは少しちがうが共通した地形の特徴として山合いにさしかかる入り口である。それはまた塞戸（さえと）とも呼ばれる。そして『遠野物語』では寒戸（さむと）となったが、この変更は字の類似ではなくて発音の類似であるということ強調したい。「サエト」と「サムト」を言う場合、「サ」と「ト」ははっきり発音するが、間の「エ」や「ム」は弱く小さく発音するからである。

幼少時を遠野で生まれ育った筆者としては、たとえば、『遠野物語』で振り仮名を付けてある地名で、附馬牛村は「ツクモウシ」村ではなくて「ツギモス」村と発音して、むしろどんな漢字を書くかはあとで知った。同様に早池峰山は『遠野物語』第2話で「早地峯」と書かれて「ハヤチネ」であるが、遠野の人は「ハヤツネ」と発音している。土淵村は「ツチブチムラ」ではなくて「ツツブツムラ」と当時は発音していた。六角牛山は「ロッコウシサン」ではなくて「ロッコスサン」と呼んでいた。

筆者が幼児入学した遠野小学校は当時鍋倉山ナベクラのふもとにあった。今はホテル「あえりあ遠野」のある辺りである。入学したのは1936年（昭和11年）4月である。小学校の講堂兼雨天体操場は鍋倉山頂にある鍋倉神社の参道入り口にある大鳥居のそばにあった。それで雨天体操場の窓際には肋木が並んで取り付けられていて、これに登ると窓から鍋倉神社の大鳥居と参道を見下ろすことができた。そしてそこから撮った写真絵葉書があった。

柳田國男が旅先から家族へ送った絵葉書の裏表を印刷した大判の写真集が出版されているが、その中の1枚にこの鍋倉神社参道の絵葉書があった。しかし写真集では、他の絵葉書ではその場所が記入されたりしているが、この鍋倉神社参道の絵葉書写真には記入されていなかったもので、ここで指摘しておきたい。

当時、筆者が入学した時には、鍋倉山のふもと沿いに古い校舎が残されて、そこに1年生の教室が配置され、2年生以上は^{ライナリ}菜内川沿いの新しい校舎に教室が置かれていた。新しい校舎は木造2階建だが塗装されガラス窓だったのに対して、1年生の古い校舎は、おそらく明治時代に建てられた素木造りの板葺き屋根で紙張り障子窓の平屋で、山のふもと沿いに教室、反対の校庭沿いに廊下という構造であった。だから鍋倉山のふもとを巡る路からは教室を見下ろせるのであった。

1年生の時の冬になって校庭にも雪がつもり、雪かきをした校庭で休み時間がおわり教室へ入るのに筆者は少しおくれた。ところが教室の入り口は中から押さえられて入れなかった。担任は男の鱒沢徳三先生だった。そこで筆者は一計を案じ、校外へ出て鍋倉山ふもとの路から雪球をつくって障子窓へ投げつけて破り教室内が騒いでいるのを見届けてから、そのあと教室の先生のところへ行ってあやまり許してもらったことがあった。

やがて2年生になって、教室は新しい校舎に移り、担任も女の今野アヤ子先生に代わったが、1937年（昭和12年）の夏には日中戦争がはじまり、旧制の県立遠野中学校長を退職した父が仙台に移転したので、筆者もその年末転校して仙台の連坊小路小学校に1938年（昭和13年）1月から通うことになった。

- 1) これはあきらかに誤植で、正しくは16番地である。『遠野物語』初版という原典としては、確認し

ておくべき重要な点である。

- 2) 柳田國男『遠野物語』（増補版）再版覚書の冒頭で言及している。
- 3) これは、池上隆祐が有賀喜左衛門、中村吉治と編集した『郷土』誌の「石」特集号を、昭和7年（1932年）7月柳田國男に謹呈したお礼に、「これは君がもっているのが一番いいだろう」と云われて頂いたものである（池上隆祐「柳田國男先生の思いで」）。
なお資料によっては、池上隆祐の生年を明治29年（1896年）としているものがあるが、あきらかに間違いである。正しくは明治39年（1906年）1月15日生まれ、昭和61年（1986年）4月3日他界80歳である（新聞掲載の訃報による）。
- 4) 筆者は以前の論文で桑原武夫が遠野で泊まった大きな宿屋を高善旅館ではないと思ったのは、うろ覚えでかん違いであった。田野崎昭夫「『遠野物語』少考」『人文紀要』中央大学人文科学研究所、第48号、2003年、142頁で述べた。それは桑原がコンクリートの煙突の字を明確に書いているので、遠野で代表的な高善旅館ならば書かない筈はないと筆者は思った。また高善旅館は土蔵が海鼠壁（なまこかべ）で塀ではないから違うとも考えた。また波形トタン板の塀と考えれば、福田旅館かも知れないと思ったが、しかし福田旅館は実際は透かし板木塀であることを思い出した。したがって筆者の「『遠野物語』少考」での記述は撤回し訂正する。桑原武夫が「海鼠壁の大きな宿屋」と書けば筆者は誤解しなかった筈である。

なお、これもうろ覚えであるが、たしか桑原武夫は、この頃は東北大学にいて「俳句第二芸術論」を書いて評判になっていたと思う。何れ出身校の京都大学に戻るならば、仙台にいるうちにと思い立って遠野を訪れたのかも知れない。